

# 古代中世の雑掌をめぐる実態

奥野義雄

はじめに

雑掌についての論究は余り多くないが、いく人かの先学によって究明されている論稿は公にされている。その代表的な論稿として、原田重氏<sup>①</sup>と松崎英一氏の国雑掌に関する論究がある。ただ、両氏の論究の契機となった論稿は、坂本太郎氏の「朝集使考」<sup>③</sup>であり、吉村茂樹氏の「国掌について」<sup>④</sup>であろう。しかし、吉村氏の国掌と雑掌が同一官職と理解して言及した論稿に対して、竹内理三氏は、「在庁官人の武士化」において、

平安時代後半期に、国々の正税等の運送に従事した官人として、国雑掌があつて、何れもその地方の豪族が之に当たっていたが、或は国掌はこの国雑掌のことであろうか。然し国雑掌は、何れも皆成安と名乗っているにも拘わらず、天曆末に備前国々掌に補せられた者は、村上連吉里と称しているのを見れば、必ずしも同一とも思われない。

と言及して、国雑掌は正税運送・運上への従事者であることを指摘して、国掌と国雑掌が同一官人であることを否定視する論及を示している（傍線・傍線―奥野、以下同様にて略す）。

また、泉谷康夫氏も国雑掌について触れながら、国掌について検討して国雑掌と同一官人でないことを言及している。すなわち、泉谷氏は、原田氏が論及した四度使雑掌に視点をあてて言及しながら、

四度使雜掌がすでに奈良時代よりあったとすると、国雜掌は四度使雜掌と系譜的に直接連るから、その期限は奈良時代にまでさかのぼることができる。ところが、これから述べようとする国掌は、貞觀年中に――九世紀の六・七十年代に――多く設置されている。従つて、国掌と国雜掌とは別系統の職掌であるとすべきであり、国掌は国雜掌のことであろうとする見解は明らかに誤っている。

と述べている。<sup>⑦</sup> 国雜掌が奈良時代まで遡る論証として、天平十（七三八）年の但馬国・淡路国のほか、諸国の正税帳にされている記載朝集使雜掌や弘仁十三（八二二）年九月の太政官符にみえる四度使雜掌廝丁の史料的存在の例示がある。

泉谷氏の国掌と国雜掌の同一官人説否定論には、国雜掌の存続時期と国掌の存在時期の差異のみで、同一官人説を否定すべき直接的な史料提示がないところに説得させるべき論旨に至っていないかもしれない。

ここでは国掌と国雜掌同一官人説の是非を検討する意図で言及しようとする余裕もない。むしろ、坂本氏が天平年間の正税帳の記録に表現されている朝集使雜掌が朝集使の随行員であり、その職掌を公文の取り扱いと明示されたことは、国雜掌の研究に活路がもたらされたといえる。ただ、とりわけ国雜掌が国衙在庁官人か、否かということと、四度使雜掌から国雜掌への転化・変化について究明した松崎氏の「在京雜掌」<sup>⑧</sup>の存在は一〇世紀以降一般的状态を呈しているのか、否かという課題がある。

だが、この課題以上に、赤松俊秀氏が言及した雜掌について、

中世の雜掌は二つの異なった機能を持っていた、とされている。『角川日本史辞典』によると、雜掌は、本所・領家がその莊園の管理に当たらせてたものであつて、在地で年貢・公事を徴収するものは所務雜掌、在京して莊園の渉外事務、おもに訴訟に当たるものは沙汰雜掌と呼ばれた、という。雜掌をこのように在地・在京と所在地によつて區別定義するからには、所務雜掌と沙汰雜掌とは、本来別な機能を持つ別個の存在と考えられ

るのであろう。(中略)。平安時代の雑掌について精緻な検討を加えられた松崎英一氏は、論文の冒頭で、雑掌の管掌範圍を基準として国雑掌と莊郷雑掌とに分けることを提案された。(中略)。莊郷ごとに預所のほかに雑掌が常置されていたことや、雑掌には所務雑掌と沙汰雑掌の二種類があった、とすることに、わたくしは懷疑的である。(中略)、その機能によつて預所・雑掌とを区別されており、雑掌が所務と沙汰に別れていたのではない。(中略) ※二の節に移る。雑掌は職掌人が当時の国衙にいたのではない、と松崎氏が推測しておられるのは、前記の中世の雑掌のあり方を考える上に重要な指摘である。

と言及するとともに、赤松氏は、中世の雑掌(預所の提示もあるが)の在り方と松崎氏提唱の平安時代の雑掌を国雑掌と莊郷雑掌との区別に対する理解に関心をもっているといえよう。

とりわけ、平安時代(王朝期)以降における諸派生の雑掌——松崎氏提唱の国雑掌に対して莊郷雑掌ではなく、国雑掌も公領(国領)の雑掌と莊郷ほかの所領掌握主体者の雑掌——を想定すべきであろう。また、国雑掌(公領雑掌と称す雑掌も含めたい)がどの時期まで存続し得るものかも検討する必要があると考えている。

次に、これらの検討課題を平安時代以降の雑掌にかかわる諸史料を繕きながら考えていくことにしたい。この諸史料を繕いて検討する途に、雑掌の在京性・在地性という状況が抽出できればと考えている。

## 註

(1) 原田重「国雑掌について」(『九州史学』第七号所収)

原田氏は四度使雑掌に着目して、四度使の従者としての雑掌が存在することを提示し、さらに四度使に代わつてその任務をおこなうようになったのが九世紀から一〇世紀にかけての時期であると言及する。この四度使が公

文を扱う状況に視点を合わせて、一一世紀以降に現われる国雑掌の任務である公文の扱いの職掌を重視したといえよう。

つまり、四度使雑掌が扱う「公文」の職掌の権限よりも、国雑掌の「公文」を扱う権限の方が大きいと理解することは四度使雑掌と国雑掌とは別個の存在と解釈して

いることになろう。そこには〈雑掌〉自体の職掌の変更によって、四度使雑掌から国雑掌へと転化していった官人とは捉えられなかったのであらうか、という懐疑的認識をもたざるを得ない。

- (2) 松崎英一「国雑掌の研究」(『九州史学』第三七・三八・三九合併号所収)

松崎氏の国雑掌の論究で、四度使雑掌と国雑掌を同一系統という視野から捉えたことは賛同すべきであるが、赤松俊秀氏が言及しているように、国衙官人である雑掌および在京雑掌にかかわる松崎氏の論及に対する課題の提示は納得できるので、赤松氏の論稿に譲り、その論旨を参照されたい(すでに本文中で赤松氏の論旨は掲げている)。

- (3) 坂本太郎「朝集使考」(『史学雑誌』第四二巻、第五号所収)

- (4) 吉村茂樹「国掌について」(『国司制度崩壊に関する研

究』所収)

- (5) 竹内理三「在庁官人の武士化」(『日本封建制成立の研究』所収)

- (6) 原田、前掲書

- (7) 泉谷康夫「国掌について」(『律令制度崩壊過程の研究』所収)

- (8) 松崎、前掲書

- (9) 赤松俊秀「雑掌について」(『古代中世社会経済史研究』所収)

直接本文の雑掌と結びつくものではないが、赤松氏が疑義を提示している〈所務雑掌〉と〈沙汰雑掌〉についてと、従来から『沙汰未練書』に明示されている〈雑掌〉の認識と現実の中世社会での〈雑掌〉について検討の必要性があると考えている。

## 第一章 国雑掌の職掌変更と存続時期

雑掌には、国雑掌とこれ以外の雑掌―莊郷雑掌―が存在することを提示した松崎英一氏の論究以後、国雑掌および莊(郷)雑掌の用語は疑問視されることがなかったといえよう。そして、国雑掌として顕著に活動しはじめた九世紀前後から一二世紀初頭に至る時期に〈国雑掌〉が存在していたと考えられがちであるが、〈国雑掌〉として存続し得た時期はいつ頃までであったのかは視野になかったようにみえる。その大きな要因は、原田・松崎両氏の論究の基礎となった坂本太郎氏の論稿が平安時代(前半から後半にかけて)に焦点が絞られていたためであらう。

確かに先学諸氏が掲げる九世紀初頭の史料には、四度使雑掌が明示されている。たとえば、大同四（八〇九）年正月二十六日付の「大政官符」をみると、

一 聴運九箇使料米事

貢綿使料四百六十石

（中 略）

朝集使料百三十石

使料八十石 史生料三十石

雑掌二人料二十石人別十石

正税帳使料八十石

使料六十石 雑掌二人料二十石人別十石

大帳使料五十石

使料三十石 雑掌二人料十石人別五石

調帳使二人料二十石人別十石

（下 略）

という四度使の雑掌二人ずつの記載<sup>①</sup>（傍点・傍線―奥野、以下同様にて略す）、そして弘仁十三（八二二）年間九月二十日付の「太政官符」の「四度使雑掌廝丁<sup>朝集使四人・自余三使各二人</sup>」という四度使雑掌の存在を明示する史料<sup>②</sup>によって、朝集使雑掌・正税使雑掌・大帳使雑掌・調帳使雑掌が四使に各々二人ずついたことがわかる。また、八〇〇年代初頭から前半に至る間に朝集使に随行する雑掌は二人から四人に変更されているが、朝集使だけに雑掌の増加には何らかの意図があるのであろうか。このことを明確にできる史料は抽出し得ない。

さらに、四度使雑掌から国雑掌へと転化した時期についても明らかにできる史料は検出し得ないが、国雑掌として存在していると理解できる史料を掲げると、寛弘二（一〇〇五）年十二月十二日付の「班符国解」にみえる

山城国雑掌秦成安解 申請 官裁事

請被因<sub>レ</sub>准傍例。被下宣旨於所司。班符未下間。暫置勘出。勘済前司任終長保三。当任同四五。寛弘元。并四箇年租帳状。

右謹検案内。此国校田授口帳。合期勘造。進官已了。即請官省外題。欲勘済之處。主税寮勘返云。班符未下之間。租帳非蒙宣旨。輒難勘済者。雑掌徒抱公文。辛苦寮底。望請。官裁被下宣旨於所司。（下略）

という記載から一〇〇〇年代初頭には、班符についての宣旨が下らないために苦慮している山城国の国雑掌秦成安の様子が窺えることから、この時期一〇〇〇年代初頭あるいはその前後には、四度使雑掌ではなく、〈国雑掌〉として活躍していたことがわかる。

このように〈国雑掌〉へ転化した時期は一〇〇〇年代（一一世紀）前後になると想定できよう。しかし、確証し得る史料は、現段階で抽出できないため、想定の域は出ないといえる。

ただ、康保三（九六六）年九月一日付の「清胤王書状」にみえる雑掌晴延の動向から四度使の雑掌身分とは考えがたい。すなわち、同書状には

一可被早令料物隨身<sub>（進下同シ）</sub>追上雑掌晴延事

件晴延棄預公文、寝以逃去、而間預公文称不入<sub>（之カ）</sub>□由、未成之、此即預公文興安申也、（下略）

とあり、雑掌晴延に料物進上させるべきことが明示され、一一世紀以後に表現されている雑掌「〇〇成安」という同一名と異なる「晴延」の名が記載されている。国雑掌が史料に現われた初見と考えられるのは、さきの寛弘二年の「班符国解」にみえる「山城国雑掌秦成安解 申請 官裁事」の「勘済前司任終長保三。当任同四五。寛弘元。

并四箇年租帳状」という文言<sup>⑤</sup>から窺え、寛弘二年以前の長保四（一〇〇二）年には、国雑掌が租帳に関与していたことが考えられる。この国雑掌は「成安」と名のつている。

だが、寛弘二年の国解にみられた国雑掌は一〇四〇年代まで史料から消長し、長久五（一〇四四）年三月十七日付の「丹後国前雑掌海成安解」<sup>⑥</sup>以後、応保二（一一六二）年十月二十九日付の「大宰府政所下文」の「下 大隈国雑掌」<sup>⑦</sup>に至るまで存続していく（正確には、承安二（一一七二）年の史料と承知されている「土佐国雑掌紀頼兼主殿寮沙汰人伴守方問注記」<sup>⑧</sup>までとすべきである。この史料を含めると、平安時代末まで国雑掌に関する史料は二四通ほどになる）。

これらの史料の内、さきに触れた長久五年の前雑掌海成安解には「請被任道理裁定御封代増減愁状」の文言に続いて

一任四箇年料麻布九百四十五段

年別二百三十六段一丈

二百二十五段 調絹三十疋庸綿百二十屯租穀二百石中男油一斗四升封丁二人等代

（中略）

右件封戸調庸代、任前司分付、寺家政所勘定、追年進済、（中略）、早前司分付勘文、当任文書相並可遣前司許也、至于雑掌、只任前勘文進已、（下略）

という記載<sup>⑨</sup>が示す雑掌の職掌が具体的に明示されている。

このように国雑掌がおこなうべき具体的な職責については、長久五（一〇四四）年の国雑掌と同様な史料——御封あるいは御封米と国雑掌との関係を示す文書——が数多くある。その二・三例を次に掲げていくことにしよう。

まず、寛徳二（一〇四五）年七月十一日付の「周防国雑掌秦成安解」には、

周、防、国、雜、掌、秦、成、安、解、申、注、進、東、大、寺、御、封、米、所、濟、勘、文、事

合

前、司、任、終、長、久、二、年、御、封、百、烟、代、准、米、二、百、四、十、一、石、二、斗、九、升、一、合  
『寺定三百十九石四斗四合之外可有前分序料』  
『千二百二十屯八兩』  
『代米百三十四石六斗屯別一斗二升』  
 調、庸、綿、千、百、二、十、一、屯、代、六、十、七、石、二、斗、九、升、一、合

(中略)

当、任、同、三、四、寛、德、元、并、三、箇、年、料、色、目、同、前

『寺定千二百七十七石六斗一升六合』

此外四ヶ年前分序料車力并百二十一石四斗四合可有之』

都、合、准、米、九、百、六、十、五、石、一、斗、六、升、四、合

所、濟、米、千、四、百、五、十、四、石、八、合、六、勺  
『寺定千六百六十六石八斗四升六勺改千六百九十七石七斗五升五合』

(中略)

右、件、四、箇、年、御、封、米、所、濟、勘、文、注、進、如、件、

(年月日略)

雜、掌、秦、成、安、

という御封米の所濟勘文を注進したことを明示<sup>(10)</sup>している。

次に延久五(一〇七三)年八月三日付の「伯耆国雜掌秦成安解案」をみると

伯、耆、国、雜、掌、秦、成、安、解、申、注、進、造、東、寺、御、封、所、濟、勘、文、事

合

治、暦、二、年、料、五、十、烟、『准米百六石四斗七升』  
代錢五十貫五百八十文  
代手作五十二段  
(布施)

調、絹、十、九、疋、(割註略)



庸・綿七十屯八両（割註略）

（中略）

『准米千十一石七斗七升 八ヶ年料』

都合手作布四百八段代准米四百八石 八ヶ年料

所済四百八石定『定三百七十八石』

（中略）

『封丁八人 料四石 人別五斗

鑑取八人 料八石 人別一石

右、八箇年御封所当、注進如件

（年月日略）

雑掌・秦在判

という記載<sup>①</sup>があり、造東寺に関する御封所済（御封所当）の進上を国雑掌秦成安が遂行した解文である。

最後に康和四（一一〇二）年七月 日付の「遠江国雑掌秦成安解」を掲げると、

遠江国雑掌秦成安解 申注進東寺御封所済勘文事

康和元一料百五十烟 代二百八十三石一斗二升五合

調・純三十九疋五丈二尺五寸 代三十九石八斗七升五合

庸・糸七十五絢七両二分 代三十石七斗五升

中男作物油一斗二升六合 代二石五斗

封丁六人 代三十石

（中略）

都合・四・个・年・料・千・百・三・十・石・六・斗

所・済・

准・米・千・百・八・十・八・<sup>(石)</sup> 代・絹・五・百・九・十・四・疋

(中) 略)

右、勘・文・注・進・如・件

(年月日略)

雑・掌・秦・成・安

とあり、遠江国雑掌が東寺領御封の租税(調・庸)勘文を注進したことを明示している。このように一〇四〇年以後、一一〇〇年代(前後)に至るまで、国雑掌は正税にかかわる職掌を担ってきたことがわかる。

国雑掌が四度使雑掌から転化したと考えられて久しいが、その職掌は異なることなく租税(勘文)に関与し、四度使雑掌の立場の時期には正税の運搬・運上に従事し、国雑掌の折には正税(租庸調)運上・注進や所済勘文つまり公文にかかわっていたと考えられる。だが、一一〇〇年代前後には、租税の所済勘文の職掌のみでなく、寺領押妨の停止にかかわる国雑掌の職掌の職責がみられる。次にその国雑掌の史料を掲げることになろう。

寛治三(一一〇八九)年九月二十二日付の「大宰府下文案」がそれで、

下・筑・前・国・雑・掌・

可・停・止・松・永・法・師・妨・、令・観・世・音・寺・領・知・桑・垣・一・处・事・

在上座郡把岐荘内

(中) 略)

右、依彼此訴、尋子細之处、松永法師所進公驗不分明者、停止松永法師妨、可令観世音寺領掌之状、依上宣、所仰如件、

という記載<sup>13</sup>があり、把岐荘内の桑垣一処を松永法師が妨げたことに対して停止すべき旨を大宰府より筑前国雑掌に下された。

また、もう一例掲げると、応保二（一一六二）年十月二十九日付の「大宰府政所下文」には、「下大隈国雑掌」「可任次第証文旨、令停止篤妨、台明寺住僧等訴申当寺四至内作田等事」「就中於彼岸田灯油田者、台明寺勝示内也」「以解者、如証文者、事為功德、早停止篤妨、可令勤行恒例仏事之状」<sup>14</sup>という文言があり、台明寺四至内領知の彼岸田灯油田を篤房が妨げるために同寺住僧らが訴訟をおこなったことよって、早く押妨を停止することで恒例仏事の勤行をおこなことになる、大宰府政所より大隈国雑掌に下されたことを示している。

筑前国と大隈国の国雑掌に下された寺領の押妨停止の執行は、もともと国雑掌がおこなっていた職掌とは違う領域の職掌であったことが窺えるとともに、正税（租・庸・調）運上・注進や租税所済・勘文などと異なる事象は、一〇〇〇年代（一一世紀）後半から一一〇〇年代中頃に至ることもわかるが、二史料の記載による限定した事象であるため、この時期に現われた国雑掌の異なった職責と断定することは避けたい。

ただ、律令期の四度使雑掌から展開してきた王朝期の国雑掌もともに、租税と直接関連する職掌が課せられていたことは確かであるといえよう。そして、明らかに異なる国雑掌の姓名の確かさは、すでに触れた康保三（九六六）年の雑掌晴延以後には不透明となり、〈姓・成安〉という統一された姓名が王朝期の国雑掌の特徴であるかもしれない。この国雑掌の不透明さについては、先学諸氏が論究しているが、確証し得る史料は検出されていない。

ただ、「〇〇成安」という姓名の時期は、さきに触れた康保三（九六六）年の清胤王の書状にみられる雑掌晴延という名が明示されて以後の時期（恐らく九六〇年代以降かもしれない）に出現し、承安二（一一七二）年の史料と容認されている「土佐国雑掌紀頼兼主殿寮沙汰人伴守方問注記」にみる「土佐国雑掌右官掌紀頼兼」という明示がある一一七〇年代以前の時期までであると考えられる。つまり、九六〇年代後半から一一七〇年代以前（以後も

形骸化して存在するかもしれないが）までの王朝期にあたる約二〇〇年間には国雑掌は姓名〓本名は伏せられていることになるが、その理由は明らかでない。

この国雑掌の姓名が共通して「〇〇成安」ということについては、原田重氏<sup>(16)</sup>、松崎英一氏<sup>(17)</sup>、竹内理三氏<sup>(18)</sup>、赤松俊秀氏<sup>(19)</sup>、そして泉谷康夫氏らの諸氏は独自の視点で論及するが、いずれも断言し得るような言及はひかえているように読み取れる。このような国雑掌の「本名」検討の必要性はいうまでもないが、約二〇〇年間に「何故に」国雑掌に本名公表が認められなかったのかという往時の社会状況を究明することはより一層必要ではあるまいか。

さらに、国雑掌がいつ頃まで「国雑掌」として存在し続けたものかも検討することは考えるべきであろう。だが、いまのところ、国雑掌の本名不公表の社会状況を究明する余裕はないが、国雑掌の存続時期については、ここで検討していくことにしたい。

そこで、次に国雑掌存続時期の終焉について諸史料を繙きながら、若干検討していくことにしたいが、その前に国雑掌が一世紀末期以後、従前の形態と職掌のまま存在していたものかを少し史料から窺うことにしよう。

まず、寛喜四（一二三二）年三月十八日付の「周防国雑掌調成安請文」をみると

賀・茂・祭・用・途・可・進・済・事・

右、当国者、永□宣旨召物以下、大小調庸一向被免候了、□此旨<sup>(以カ)</sup>、可令計披露給欵、成□誠惶誠恐謹言、<sup>(21)</sup>とあり、賀茂祭用途の進済すべきことを謹んで請申すという雑掌の請文には、賀茂祭用途料の進済にもなつて大小の調庸の租税が免除されたことを明示している。

この寛喜四年からずっと下って建治二（一二七六）年正月 日付の「大宰府下文案」には、

下 薩・摩・国・雑・掌・

可早任 宣旨状、令当国造進天満宮并国分寺事

とあり、<sup>(22)</sup>「云天満宮、云国分寺、不可不被造営欤、就中、蒙古凶賊等来着于鎮西、雖令致合戰、神風荒吹、異賊失命、乗船或沈海底、或寄江浦、或則非靈神之征伐、觀音之加護欤」<sup>(23)</sup>「且任先例、且准傍例、依宣并国司領狀、当天満宮并国分寺以下、可令造営之由」という記載がある。

この下文案から、元寇・蒙古襲来によつて蒙古軍に打撃を与えたのは観音菩薩の加護によるゆえに天満宮と国分寺の造営が大宰府庁から薩摩国雜掌に下されたことを示している。この国雜掌に命じた造天満宮・国分寺の背後には、造営料の租税徴収・備進があつたと充分想定し得るが、下文案にはこのことは表現されていない。

薩摩国雜掌と同様に造寺・造宮とかかわる国雜掌は、四〇年ほど遡つた弘安十（一二八七）年十月十三日付の「関東下知状案」にみえる。すなわち、

造東大寺周防国雜掌与同与田保公文朝保法師法名相論所職并年貢事

成下

右、（中略）、所詮、如雜掌申者、当国諸郷保書生・公文・田所等、可為国衙進止之旨、去貞永元年被○宣旨并関東御下知之上、当保公文職代々国司進止之条、証文炳焉也、（中略）、如覺朝申者、当保公文職・同名田等者、代々地頭兼帶之条、建保五季御下知守護人充行・寛元々年安堵御下知文等明白也、（中略）、爰雜掌所進貞永元年宣旨并関東御下知者、諸郷保書生・公文・田所職事、守先例、於領家・国司進止所職者、地頭更不可妨之旨、被載之、（中略）、次年貢未進事、両方雖申子細、結解之後、可有左焉者、依鎌倉殿仰、下知如件、

という記載<sup>(24)</sup>があり、造東大寺周防国雜掌と同国与田保公文朝保との間で公文職と年貢未進にかかわる相論に対する鎌倉幕府（源頼朝）の下知が下されたのであるが、国雜掌による保公文職は代々国司進止であるとする言い分に対して、覺朝が申す保公文職と名田（の年貢）などを代々地頭兼帶という言い分は相論で告げられている。この相論で注目すべきことは、与田保公文職付帯が国司の進止によるために、国雜掌が関与していた事態であろう。とりわけ造東大寺周防国の国雜掌は、すでに康和三（一一〇一）年の甲斐国雜掌である三枝成安解に明示されていた「申

注進造東寺御封所濟勘文事」という文言にみる造東寺と同様な存在であったと考えられる。

このことはともかく、正応二（一二八九）年六月と認められている「某書状案」にも「安芸国雜掌」という文言がみえる。だが、さきの周防国雜掌ともに名前すら表示されていない。

しかし、元亨三（一二三三）年五月十八日付の「薩摩国雜掌紀宗繼請文」には、「薩摩国雜掌宗清掠申、大嘗会米事」「紀宗繼請文」という文言から、薩摩国の国雜掌として請文を提出していた紀宗繼と宗清の二人が存在していたことが窺える。また、嘉禄二（一二二七）年閏九月二十日付の「鎮西御教書」にも、「薩摩国雜掌明尊申、伊敷村名主四郎入道打止国検、抑留濟物由事」という記載があり、薩摩国にはもう一人国雜掌明尊という人物がいたのか、雜掌が交代したものか、いずれかがと考えられる。

この御教書の時期つまり一二三〇年代後半以降には、史料から〈国雜掌〉の姿はみられなくなるが、この時期以後に国雜掌は存在しなかったとは断言しがたい。

なぜならば、次の史料によって、一三三〇年代まで国雜掌は存在していたことが窺える。すなわち、正慶元（一三三二）年と認められている「造東大寺領肥前国雜掌申状」がそれで、

造東大寺領肥前国雜掌重言上

欲早当国地頭・御家人等、背度も御教書、不応国務、不入立雜掌於郷保上者、（中略）、被経御注進、於軒曲之地頭・御家人者、可被処罪科由、被成下重御教書於郷保、（下略）

という記載があり、肥前国地頭・御家人らから御教書に再三違背して国務に應じないことに対する御成敗による御教書を下してほしいという主旨である。この国雜掌の言上の根底には「如当国図田帳者、公田四千余丁也、爰号或新免・新給、抑留正税、称或恩掌令押妨国領、（中略）、恣令押領国領之間、如当时者、残田僅五十余丁也」という状況があり、国図田帳にいう公田は四千余丁であったのが、わずか五十余丁になるほど押領され、新免・新給と称し

て正税を留保するという地頭・御家人の押妨の事態が窺える。だが、地頭らの押領・押妨の状況のみでなく、国雑掌は公田にかわる租税（正税など）の徴収・備進の職掌を担っていたことがわかる。この事象は古代以来継承されてきたものであるといえよう。

このように国雑掌に関する諸史料によるかぎり、四度使雑掌から転化してきた国雑掌の職掌・職責は、荘園制の進展にかかわらず現存する公田Ⅱ公領および封戸などの租税徴税・運上・注進や所済勘文などが主たるものであるが、所職・祭礼儀式用途料・造寺造宮などにかかわる職掌を担っていることは明らかであろう。

そして、国雑掌として活動してきた時期は平安時代後半であるが、鎌倉時代以後も国雑掌は存在し、室町時代前半まで国雑掌は公田Ⅱ公領（国領）の租税徴収・運上や所済勘文などを遂行してきたと考えたい。

では、荘園における雑掌はどのような存在であり、次に従来から提示されている（<sup>11</sup>）「荘雑掌」と称されている形態であるものかという疑問に対して、諸史料をもとに検討していくことにしたい。

## 註

（1）（2）『類聚三代格前篇』（<sup>新訂</sup>増補国史大系〈普及版〉）

（3）『朝野群載』（<sup>新訂</sup>増補国史大系 第二九卷上）

（4）『平安遺文』第一卷、第二九〇～二九八号文書（主に第二九七号文書）（以下同様にて、平安遺文一一二九〇～二九八というように略す）

（5）竹内理三「在庁官人の武士化」（『日本封建制成立の研究』所収）

『朝野群載』卷二六（<sup>新訂</sup>増補国史大系 第二九卷上）

（6）平安遺文二一六一七

（7）平安遺文七一三二三〇

（8）平安遺文七一三九〇六

（9）平安遺文二一六一七

（10）平安遺文二一六二五

この史料と同年十二月十一日付の「阿波国雑掌栗成安解」にも御封代（御封米ではなく御封麦である）のことが示されている。すなわち、

阿波国雑掌栗成安解 申進東大寺御封代麦事

合七十石（割註略）

右件麦当年御封代、進上如件

という記載がそれである（平安遺文二一六二八）。

(11) 平安遺文三一〇九三

この史料と同様に御封代に関する国雑掌の解文があり、次にそれを掲げることにはしたい。

寛治七・八年と考えられている「伯耆国雑掌秦成安解」にも「造東寺御封所済勘文」という文言がある（平安遺文四一一三二八）。

また、御封ではないが、法会用途料にかかわる国雑掌の職責があることを、延久五（一〇七三）十一月十日付の「美作国雑掌久米成安解」の「真言院孔雀経法料米」として六〇石を進上したという文言から窺える（平安遺文三一〇九四）。

(12) 平安遺文四一一四九二

(13) 平安遺文四一一二七八

(14) 平安遺文七一一三三〇

(15) 平安遺文七一一三六〇

(16) 原田重「国雑掌について」（『九州史学』第七号所収）

(17) 松崎英一「国雑掌の研究」（『九州史学』第三七・三八・三九合併号）

(18) 竹内、前掲書

(19) 赤松秀俊「雑掌について」（『古代中世社会経済史研究』所収）

(20) 泉谷康夫「国掌について」（『律令制度崩壊過程の研究』所収）

泉谷氏は「〇〇成安」にいて「成案」と解釈しているが、納得させるには不十分であり、「実名のみえる例としては、僅かであるが、備前国右生吉倫・撰津国雑掌吉成・土佐国雑掌紀頼兼があげられる」と言及している。

竹内氏や赤松氏らと解釈が異なる。

(21) 『鎌倉遺文』第六卷、第四三〇〇号文書（以下同様にて、鎌倉遺文六一四三〇〇というように略す）

(22) (23) 鎌倉遺文一六一二二二

(24) 鎌倉遺文二一一六三六六

(25) 平安遺文四一一四一四

(26) 鎌倉遺文二一一六八八七

(27) 鎌倉遺文三七二八四〇四

(28) 鎌倉遺文三八三〇〇〇五

(29) (30) 鎌倉遺文四一一三八三七

(31) 〈荘雑掌〉と称されるもとは、松崎英一氏の〈荘郷雑掌〉に由来する。松崎氏は「封戸郷からの封戸の徴収にも関係有するようになったであろう」と言及しているが、〈郷雑掌〉とは封戸郷雑掌のことといえよう。また、松崎氏の〈荘雑掌〉の見解には、本文で検討していくが、〈国雑掌〉に対して〈荘雑掌〉と言及することには疑問がある。



## 第二章 莊園公領下の雑掌の存在形態

——任命主体の社寺権門の雑掌と公領（国領）の雑掌の諸相——

国雑掌と莊郷雑掌に分けて「雑掌」を考えるべきであると提示した松崎英一氏は、「雑掌」の所管職掌に視点を当てて言及しているが、諸国に国雑掌が設置されたように莊郷ごとに雑掌が置かれたとする論究は、問題視すべきではないかと考えている。次に、松崎氏の「莊郷雑掌」についての論及の主な記述を掲げることにはしたい。

庄雑掌が年貢徴収・弁進の責任者的地位にある庄官の一人であったことが判るのである。（中略）。

そして年貢徴収を行ない、土地に対する領知・管理権の存在を発達させてきたかゝる国雑掌の存在こそは中世の莊郷雑掌の淵深であり、平安末期に既にその徴証の検せられること、（下略）

と述べて、松崎氏の「莊郷雑掌」提示の意図が窺える。

この論旨を単純に考えても、無数に「莊郷雑掌」がいたことになるが、果たしてそれほど無数に雑掌が存在していたものかは疑問視せざるを得ないであろう。

この莊郷雑掌とともに注視すべきことは、すでに論及したように一三三〇年代に至るまで国雑掌が存続して、国雑掌の職責は公田の租税（正税など）を徴収・備進することであるが、公田つまり公領（国領）として存在している別符・保などからの租税徴収・備進などの職責を担う雑掌の存否ではないだろうか。

そして、「莊郷雑掌」と規定し得るものか、否かということと、莊園・公領の諸領地、つまり別符・保・御厨・湊・泊・関、そして国衙領・郡領域などでの雑掌の存否に関心事が生起される。

そこで、ここでは莊郷とりわけ莊園私領における雑掌と、公領（国領）における雑掌の実態とはどのようなものであったかを、諸史料から検討することにはしたい。ただ、莊郷雑掌と公領（国領）の国雑掌を同時に検討すること

は煩雑になりがちであると考えられるので、ここではさきに莊郷——実際には莊園私領に焦点を絞っていく——の雑掌に関連する諸史料を繙きながら検討していくことにするが、とくにこの視点の中心として雑掌の任命・補任主体に焦点を当てていくことを断っておきたい。

国雑掌が一二三〇年代に至るまで存在し続けたことを諸史料から提示してきたが、莊郷とりわけ莊雑掌が史料で表示されるのは一二五〇年代前後であろうか。建長三（一二五一）年五月二十一日付の「六波羅下知状案」には、「尾張国海東中莊雑掌申」という文言によって、松崎氏が提示した「莊雑掌」が存在していたことの傍証となり得る。一二五〇年代にはじめてというべきかもしれない莊雑掌が史料上に現われたとも考えられなくはない。しかし、単に「雑掌」という表示は、この下知状案の時期（一二五一年頃）よりも二〇年以前にみられる。それは、寛喜三（一二三一）年四月二十一日付の「関東御教書」に示されている記載で、

一 本年貢外半分事

（中 略）

而今地頭者、以神社仏寺之上分、本家領家之召物、為本年貢之由申之、雑掌者、預所定使得分、皆以年貢也、不可割分之由申之云々、（中 略）、

一 本司跡名田事

右、地頭者、以件名田内、引募新給田、其残者、弁済所当、不可勤公事之由之、雑掌者、給田之外者、如百姓可弁勤所当公事之旨申之、雑公事不蒙領家預所之免許、任自由不及立用、（下略）

とあり（傍点・傍線―奥野、以下同様に略す）、諸国新補地頭に対する得分の条々には、雑掌と地頭を対比して明示されている。この条々には、年貢と名田にかんする条項に雑掌による地頭得分への申上がみられる。

しかし、この雑掌が莊雑掌であるものか、否かは明確にしがたい。ただ、一二三〇年代になって国雑掌とは異なる

る雑掌が現われてきたことは確かであろう。

そこで、次に一二三〇年代以降の雑掌に関する史料を五例ほど掲げることになしたい。

① 建長元（一二四九）年七月二十三日付の「関東下知状」<sup>⑤</sup>

久遠・寿量・院・領・駿河・国・宇都谷・郷・今宿・傀儡・与・寺・家・雑・掌・僧・教・円・相・論・条・々

一 旅人雑事用途事

（中 略）

一 二所詣人夫伝馬事

（中 略）

一 過料事

（下 略 ※在家間別銭事・白米事・人夫兵士事・阿曾尼作稻事の条項略）

② 文永四（一二六七）年七月 日付の「東大寺申状案」<sup>⑥</sup>

東大寺申

欲早被裁許、停止寺領美濃国茜部莊地頭代衛門尉行村自由押領、莊務可為寺家当寺進退由并依犯用百口学生供料絹等、被行○村於重科子細状、

（中 略）

右、当莊重色之由緒、（中略）、依地頭之濫妨、莊家不合期之余、為寺務一旦之計、（中略）、然而其後数代止請所之儀、寺家之雜掌令莊務畢、然者、請所之進退、今更雖不及訴訟、近年又依宛行之、地頭代自由押領之間、所訴申也、（下略）

③ 正応元（一二八八）年五月十七日付の「六波羅施行状写」<sup>⑦</sup>

古代中世の雑掌をめぐる実態

八幡宮寺領淡路国鳥飼別宮雜掌与地頭佐野木工助富綱法印法名慈仏代清綱相論所務条々

一 押領貞正畠三百歩、苅取作麦由事、

一 百姓名々五名内公田坪、地頭押領由事

(中略) ※神人弓射段・下地加徴米責取などの条項略)

一 撰取百姓名熟田、立替地頭名簿地由事

(下略) ※小綱名押取事・作稻苅取事・追捕物事などの条項略)

④ 嘉元三(一三〇五)年二月 日付の「大和春日社司等解」<sup>(8)</sup>

一通 雜掌解

右、社司等謹考旧貫、和泉国和田莊者、貞永年中被寄進当社領以降、(中略)、於役夫工米者、為一度無勤仕之例者也、其趣具見于雜掌解、爰限于今度、被宛催之条、社威之陵遲、社家之愁歎、何事如之哉、(下略)

⑤ 正和二(一三二三)年八月九日付の「六波羅施行状」<sup>(9)</sup>

前右衛門督家卿為相卿雜掌尚弘与民部卿家卿為世卿雜掌僧覚妙相論播磨国細河莊地頭職事、

右、任去七月二十日関東御下知、可被沙汰之状如件、

例示した五つの史料をみるかぎり、宇都谷郷における租税にかかわる相論に同郷今宿の傀儡と久遠寿量院寺家の雜掌が関与していること(①)、東大寺領美濃国茜部莊の莊務進退と供料の押領に対する訴申に莊務は東大寺々家雜掌に執行させること(②)、八幡宮寺領の淡路国鳥飼別宮の雜掌と地頭との所務にかかわる相論のこと(③)、春日社領和泉国和田莊の役夫工米について同社雜掌の解文をもとに宛催されること(④)、そして右衛門督家雜掌と民部卿家雜掌との播磨国細河莊地頭職にかかわる相論のこと(⑤)などから、〈国雜掌〉に対して〈莊雜掌(郷雜掌)〉という理解が一般的であるが、〈莊雜掌〉ではなく、雜掌を任命・補任する主体者——寺院・神社・権門など

——の諸所領に關与する〈寺院（寺家） 雜掌〉〈神社（社家） 雜掌〉〈權門（勢家） 雜掌〉と理解すべきであると考  
えている。

だが、寺院・神社・權門の〈雜掌〉と提示したとしても、それぞれ一史料のみでは説得し得るとはいえないであ  
ろう。そこで、次に再び寺院・神社・權門の雜掌が關与する所領を含めた史料をそれぞれ若干掲げていくことにし  
たい。

まず、文永六（一二六九）年五月二十八日付の「若狹太良莊雜掌申文案」には、

東寺領若狹国太良莊雜掌謹言上

称地頭若狹<sup>四</sup>郎入道<sup>不知法名</sup>大番用途、切宛巨多錢於百姓、付使七人、令譴責間、難安堵由歎申、不便子細事、

という記載<sup>⑩</sup>があり、若狹国の地頭若狹四郎による狼藉（百姓に大番用途料として巨多な金錢を切宛てて譴責する事  
態）に対する太良莊の雜掌が謹んで言上したものである。この申文案には、東寺または寺家雜掌ではなく、「太良  
莊雜掌」と表現している。

次に建治元（一二七五）年九月 日付の「紀伊阿氏河莊上村雜掌從蓮申状案」をみると、

寂・樂・寺・領・紀・伊・国・阿・呂・河・莊・上・村・雜・掌・從・蓮・謹・言・上

欲早被上<sup>四</sup>当村地頭湯淺左衛門次郎宗親、被処重科、彼・宗・親・追・出・雜・掌、致・条・非・法・狼・藉、無謂子細事、  
とあり、紀伊国阿呂河莊上村の地頭である湯淺宗親は寂樂寺領阿呂莊上村雜掌を追い出して非法狼藉をおこなうに  
あたり、重科に処せられることを欲することが申し述べられ、「阿呂河莊上村雜掌」と明示している。

また、時期がずつと下がるが、文保二（一一三二）年二月十七日付の「行盛・助景連署和与状案」には、  
和与

備後国神崎莊下地以下所務条々事

古代中世の雜掌をめぐる実態

右、当・莊・領・家・高・野・山・金・剛・三・昧・院・内・遍・照・院・雜・掌・行・盛・与・地・頭・阿・野・侍・從・殿・季・繼・御・代・官・助・景・相・論、当・莊・下・地・以・下・所・務・条・事、(中略)、以別儀令和与之、田畠山河以下之下地中分、各可一円所務矣、仍和与之状如件、

という記載<sup>②</sup>があり、備後国地頭代官助景と高野山金剛三昧院内遍照院の雜掌は和与に携わっていたことが窺えるとともに、神崎莊の下地以下所務条々の相論に対する和与に關与していた雜掌は、高野山金剛院三昧院内遍照院の「雜掌」であることを明示している。

寺院雜掌に關する四例目史料の文保二(一三一八)年五月六日付の「丹波大山莊雜掌実信起請文」をみると、東・寺・御・領・大・山・莊・地・頭・中・沢・三・郎・左・衛・門・入・道・尊・蓮・与・当・寺・雜・掌・相・論、下地押領追捕狼藉事、

右、子細者、為当・寺・御・雜・掌、沙汰仕候之上者、令与同彼地頭尊蓮、(下略)

という記載<sup>③</sup>があり、東寺雜掌として起請文を僧実信は差し出していることがわかる。そして、この起請文の端裏書には「大山莊沙汰之雜掌請文正文<sup>文保二</sup>戊午五月六日」という明示があり、東寺雜掌僧実信は同寺領大山莊雜掌としての沙汰を拝受したことに對する請文正文がこの起請文であったといえよう。

寺院雜掌に限っておきたいが、「莊雜掌」としてははじめから規定されていたわけではなく、寺院雜掌に任命された後に活動すべき場所(この場合は大山莊である)が規定・沙汰されたと理解する方が妥当であると考えている。それゆえ、主体者任命の「雜掌」が存在しなければならないと考える。

では、神社(宮)雜掌について、寺院雜掌と同様に四例ほどの史料を抽出しながら窺っていくことにしよう。まず、はじめに文永四(一二六七)年十月二十五日付の「關東下知状案」をみると、

筑前宗・像・宮・雜・掌・僧・隆・惠・与・安・樂・寺・所・司・円・勝・法・眼・代・子・息・為・濟・相・論・条・々、

(中略) ※姪田村事・社務并檢断事・社役年貢事・糺繆事の条項略)

右、四個条、両方雖申子細、姪田村事、可為本所成敗由、載先段之上、不及沙汰矣、

(中略 ※狼藉事・任官事の条項略)

以前条々、依仰下知如件、

とあり、筑前国宗像宮雜掌僧隆恵と安楽寺所司代為濟との間で生じた六ヶ条の所務相論に対する関東(幕府)の下知状案文である。

次に弘安三(一二八〇)年四月七日付の「六波羅下知状」には、

筑後国御家人北野太郎家重与北野社雜掌相論当国河北莊地頭職事

右、召出両方於引付之座、相尋之处、(中略)、如家重申者、当莊地頭職者、為重代相伝、右大将家以後代々給

関東御下文、令知行来之处、(中略)、如雜申者、家重祖父家兼被停止地頭職之条、正和二年御下文嚴重也、(中

略)、雖申子細、於地頭者、<sup>(職脱カ)</sup>被補他人之刻、可為社家進止之条、嘉祿三年八月二十一日御下文分明也、(下略)

という記載があり、同国河北莊の地頭職にかかわる帰属で北野社雜掌と同国御家人北野家重との相論に対する六波羅の下知状である。この下知状には、地頭職補任あるいは解任は北野社家保有の地頭職進止権によることを明示していることと、雜掌は北野社雜掌であることを表現していることがわかる。

この下知状より三〇余年ほど下がった正和元(一二三二)年十一月二十二日付の「鎮西下知状案」には、

肥前国河上社雜掌家邦与同国神崎莊勲功人下津八郎滿法師<sup>(道本)</sup>以下輩并惣檢校為秀相論当社造営用途料事、

右、造営者、可為一国平均役之旨、就 院宣・関東御教書、雖成施行、勲功人等不鉋用之由、(中略)、正安年中

重被仰畢、(下略)

という記載があり、肥前国河上社雜掌家邦と同国の下津滿法師らと河上社造営用途で相論が生じて鎮西より下知が下されたことを示している。この下知状案には、家邦は河上社雜掌として、下津滿法師らに対して同社造営用途料＝一国平均役で相論を担ったことが窺える。

次に四例目の神社雑掌にかかわる史料として元徳四（一三三二）年四月二日付の「関東御教書」をみると、

常陸国吉田社雑掌祐真与当社神宮寺別当権少僧都成珍相論当寺別当職并山本郷正和五年以来年貢・検注以下事  
右、及訴陳之間、擬是非之處、両方和平訟、（中略）、当寺者自往古為公家、武家兼帶之御祈禱所、云異国蜂起  
之時御教書、云毎年関東政所卷数請取、顕然之處、本所一円進止之由、（中略）、次山本郷内成珍知行分年貢正  
和五年以来未進事、依致弁帶請取、遂結解畢、検注事者可依惣郷例云々、（下略）

とあり、往古より公家・武家両者の祈禱所である常陸国の吉田社雑掌祐真と同社神宮寺別当成珍との間で相論となり、同寺別当職と未進年貢と検注に関する事柄の訴陳に対する御教書であるが、公武兼帶の祈禱所である吉田社の雑掌と明示されていることが窺える。

神社雑掌も、さきに触れた寺院雑掌と同様に、神社領あるいは宮領と称される荘園や郷などの雑掌として職責を果たす形態は二次的呼称・表現であるといえる。つまり、神社（宮）領でも〈荘雑掌〉または〈郷雑掌〉と呼称されていたとしても、基本は〈神社（宮）雑掌〉であったことは確かであると考えている。

では、寺院や神社の雑掌とは若干異なるかもしれないが、権門の雑掌はどのような存在形態であったのであろうか。次に権門の雑掌にかかわる史料四例を繙きながら検討を加えていくことにしたい。

まず、正元元（一二五九）年七月二十七日付の「関東下知状案」をみると、

摂津国杵柵莊領家土御門、宰相中將家雑掌前大和守仲景并同莊公文僧月性等多田院雑掌沙弥光信相論堺事

右、光信申云、（中略）、多田堺者、東立板峯、（中略）、南者里也、（中略）、多田之内権門領二十余ヶ所雖有之、

至于者、自惟義之時、承久御補任以後、御進退之間、（中略）、文與申詞不符合之条、（中略）、仍至于山者、可  
為多田進止、依將軍家仰、下知如件、自余条、略之、

という記載があり、摂津国杵柵莊の雑掌仲景は領家土御門宰相中將家に属する〈権門雑掌〉で、雑掌仲景らと多田



院雜掌光信とが所領境界で相論に至り、將軍家の下知となったことを明示している。

次に弘安元（一二七八）年十月 日付の「丹波宮田莊雜掌申状案」を掲げると、

近衛殿丹波国宮田御莊雜掌謹言上

欲早被召出当国大山莊地頭中沢左衛門三郎基員、被行殺害人罪過子細事、

（中 略）

件元者、以建治二年□□月十二日夜半、彼基員□□帶弓箭杖、率多数人数、□□宮田御莊木乃部村□□

古木之間、（中略）、当村代官源三郎入道西善主従為相尋子細、行向之時、取籠大勢之中、無是非令殺害之畢、凡希代之惡行、未聞先傍例、（下略）

とあり、丹波国大山莊地頭中沢基員が宮田莊の木乃部村に多人数を率いて是非もなく殺害したことに對して罪科に処すことを近衛家領所領である宮田莊雜掌が言上したことを明示している。同家領宮田莊の同家雜掌が訴訟にかかわる謹言の申状は、直接訴訟をおこなう雜掌でないことを示している。

この申状から二五年ほど下がった正和二（一一三三）年の史料と認識されている「九条禪閣忠教家雜掌目安案」をみると、

九条禪定殿下御領攝津国輪田莊西方前雜掌源氏女・同子息円真阿闍梨重状無謂子細目安、

という記載と「円真之母源氏為当莊雜掌、先年与地頭及對論之時、給 本所御拳状」「況当莊者、氏女・円真等、非開発寄進之子孫、以本所重代之御家領」という文言(20)があり、九条忠教家の撰津国輪田莊西方の前雜掌源氏女は子息円真とともに地頭と相論したこと、氏女らが開発所領の寄進者ではないことを明示している。

この目安案には明示されていないが、九条忠教家領輪田莊雜掌という表現とともに、九条家雜掌とあることは、同年の「九条禪閣忠教家雜掌初度目安案」の「地頭和与状并六波羅下知状事」の条項に「此条、源氏女円真母為 本所

之、雜掌」<sup>(21)</sup>という文言からもわかる。

権門雑掌に関する四例目の史料は元慶元（一三三二）年十一月二日付の「関東下知状案」で、この案文には、

山城国葛原莊快樂・道行等申濫妨狼藉事

右、如当年六月七日六波羅注進状者、山城国葛原莊領主快樂・道行等申、多聞丸并若狭房濫妨所務之由事、彼多聞丸等号左馬寮<sup>左府</sup>菊亭前、雜掌、率人勢、追捕百姓家内、濫妨下地、責取得分物之由、（下略）

という記載<sup>(22)</sup>があり、左馬寮菊亭前左府の雜掌と呼称し、葛原莊に大勢を率いて百姓を追捕し、さらに下地に濫妨をおこなつて得分物を責め取つたということが明示されている。

このような事態は、もともと左馬寮官職であつた「権門」の雜掌が葛原莊内に乱入し、さまざまな濫妨狼藉をおこなつたことを表示している。また、このように雜掌が濫妨・狼藉をおこなう事象はさほど多くはないが、雜掌による非法はいくつか史料<sup>(23)</sup>にみえる。

このことはともかく、雜掌は莊・郷の雜掌と理解するよりも、むしろ莊園公領下の莊園における雜掌は、「権門（領）雜掌」・「寺院（領）雜掌」・「神社（領）雜掌」と三つに規定されるべきであると考えている。

このような雜掌の状況を示唆する論究を、すでに黒田俊雄氏は提示している。すなわち、

雜掌はなにゆえに在地しないのか、（中略）太良莊について具体的にみれば、周知のような雜掌定宴は、太良莊のみならずおなじ東寺供僧料所たる大和の平野殿莊、伊予の弓削島莊、安芸の新勅旨田などの莊務を兼務した実務家であつた。（中略）、立莊以来の師弟関係や東寺下層寺官としての立場などが直接の理由であつた（下略）

と言及し<sup>(24)</sup>、太良莊雜掌定宴は東寺領の寺領雜掌として職責を果たしていたことは、単に莊園の雜掌の存在と理解するのではなく、東寺（寺家）が任命・補任した「寺院（領）雜掌」として、定宴は東寺領太良莊のみならず平野殿

荘・弓削島荘・新勅旨田での雑掌の職責をはたしてきたといえよう。

また、荘園以外の〈関雑掌〉・〈湊雑掌〉・〈村雑掌〉・〈島雑掌〉・〈泊雑掌〉などが存在していたことも諸史料からわかる。

たとえば、関雑掌の一史料を繙くと、延慶二（一三〇九）年二月二十三日付の「了尊等連署起請文」に「澄承僧都雖摂津国兵庫関之雑掌」という文言<sup>25</sup>があり、〈関雑掌〉が一三〇〇年代に存在し、兵庫関にかかわる雑掌の職責を果たしていたと考えられる。

ところで、荘園を含めた私領にかかわる三種の雑掌とは別に、公領（国領）——公地・公田など——における雑掌は存在しないわけがないと考えている。

そこで、次に公領（国領）における雑掌の存否と、存在するならばどのような形態であったものかを少し垣間見ることにはしたい。

すべて国有地＝公地であった律令期以降の雑掌は〈国雑掌〉と称され、諸国に雑掌がいたと考えられている。これに対して公地の私有化にともなって社寺権門私有の神領・寺領・権門領として荘園が発達するが、国家が直接管理・知行する公地は公領（国領）として存続する。この公領（国領）と明示される公地には、国衙領・郡領・別符・保・御厨・湊・泊・関などが想定し得るが、〈別符〉〈保〉〈御厨〉〈関〉〈湊〉〈泊〉などの名称で私有地となった所領は少なくないであろう。

これらの公地・公田（公領・国領）は、国家支配の主体がない時期——幕府支配の鎌倉期・室町期——には誰が支配主体であり、知行していたのかという課題がある。この課題によつて、それぞれの公地に雑掌が存在していたとしても、公領（国領）の雑掌の任命・補任主体は明確にしがたい。このことを無視して、〈公領（国領）〉における雑掌について論究しがたいが、ひとまず中世の〈公領（国領）〉においてどのような形態で雑掌が存在していた

かを三例ほど史料を抽出して垣間見ることにしたい。そこで、次に一例目に国衙における雑掌の存否について検討していくことにしよう。

まず、元亨四（一三二四）年九月九日付の「石見周布郷文書目録」をみると、

周布郷沙汰文書御下知等事

一通 関東御下知国衙事 乾元々年二月十八日

一通 久名与地頭和与状 乾元々年十二月日

一通 国衙雑掌和与状 弘安三年九月二十六日

（下 略）

という記載があり、すでに掲げた「安芸国雑掌」とか、「薩摩国雑掌」という表現ではなく、「国衙雑掌」と表示されている雑掌の存在がわかる。この国衙雑掌は明らかに国雑掌でないことが理解できる。

また、元亨年中（一三二一～一三二三）のものとは判断されている「某申状案」には、

「殿上熟食米料所備中国隼嶋保間事

右、当保者国衙進止、本所一円之地、吉備津宮神供并殿上熟食米之料所也、（中略）、承久年中依秀康知行、被

没収之、被捕地頭之上者、以往相伝、永削其号畢、爰顧国衙之衰微、痛熟食之闕怠、（中 略）、

一通 宣旨案嘉禎

止莊号

「此条、文永二年関東問状、（中略）、次国衙・大炊寮雑掌事、四<sup>（代カ）</sup>雑掌各帶<sup>（状カ）</sup>拳、（中略）、且如建長四年御下知

者、吉備津宮神官成重・供僧安慶・隼嶋莊雑掌・壽慶・大炊寮雑掌・守安、国司<sup>（代カ）</sup>景相論云々、（下略）

という記載がみえ、吉備津宮の神供と熟食米料所である備中国隼嶋保は国衙進止の地であり、本所一円地であることが窺えるとともに、国衙の勢力が衰微して熟食米も欠如してきたことがわかる。

さらに、この案文には、国衙雑掌と大炊寮雑掌の存在が確認でき、建長四（一二五二）年の下知には吉備津宮神官や隼嶋莊雑掌とともに、大炊寮雑掌らと国司との相論があったことも明示されている。

このような状況は、すでに一二五〇年代に国雑掌ではなく、国衙や大炊寮に雑掌がいたことを示唆してくれよう。石見国の〈国雑掌〉と備中国の〈国衙雑掌〉が存在するかぎり、諸国の国衙に雑掌がいたことは充分考えられるであろう。

また、律令国家機構の一つである大炊寮に雑掌がいたことに加えて、嘉暦元（一二二六）年の史料と認められている「内蔵家雑掌申状」の「内蔵寮雑掌申」という文言<sup>(28)</sup>によって、内蔵寮に雑掌が存在していた。ここでは、大炊寮と内蔵寮の雑掌を〈国衙雑掌〉とは別に、〈寮雑掌〉と便宜的に呼称することにしよう。

では、次に二例目として国衙・寮以外に設置・任命されている雑掌を掲げると、正中二（一二三五）年十月十六日付の「鎮西御教書」の「大宰府雑掌申薩摩国阿多郡北方年貢事、（中略）、尋下雑掌之处、如今月九日雑掌為平請文者、阿多郡北方府方年貢事、去月二十七日返抄無相違云々」という記載<sup>(29)</sup>から窺え、大宰府領薩摩国阿多郡北方の年貢のことに大宰府雑掌の関与がわかり、ここでは一応〈大宰府雑掌〉とも称することにしたい。

これらの雑掌は公領（国領）において活躍していたであろうが、すでに掲げた建治二（一二七六）年正月 日付の「大宰府下文案」の「下 薩摩国雑掌」「可早任 宣旨状、令当国造進天満宮并国分寺事」という文言<sup>(30)</sup>によるかぎり、〈国雑掌〉と〈大宰府雑掌〉とは別々の存在であるが、同時期に存在していたものか、否かは判然としない。しかし、一三三〇年には国雑掌が存続し、正中二（一二三五）年には大宰府雑掌がいることを考えると、〈大宰府雑掌〉→〈薩摩〉国雑掌」という関係があったのではと想定し得るが、現段階で史料での確証はできない。

荘園公領制での公領・国衙の雑掌は直轄される国家がないため、各国の国衙や元来直轄組織——大宰府・大炊寮・内蔵寮など——は個々に雑掌を任命・補任していたと考えられなくはないが、速断は避けておきたい。

さきの申状案に明示されている隼嶋保は国衙進止の公領（国領）であるが、保の雑掌の表示がないため、三例目に保（公領〈国領〉）の雑掌の存否について窺うことにしたい。

まず、嘉元三（一三〇五）年十二月三日付の「平孝信請文案」にみえる「丹波国主殿保雑掌定慶申抑留年貢以下由事」という文言<sup>(31)</sup>によって、主殿寮領の〈保雑掌〉の存在が窺える。また、さきに掲げた備中国隼嶋保はもと国衙進止の保であったが、その後隼嶋荘として立荘することになったことは留意しておきたい。

そして、嘉元四（一二二九）年のものと認識されている「某奉書案」には「□芸国入江保雑掌定勝申、円行以下輩違勅狼藉事」という文言<sup>(32)</sup>があり、主殿寮領の安芸国入江保雑掌が円行らの狼藉を申上したことを明示しているが、この案文より数ヶ月以前の嘉暦四（一二二九）年四月十四日付の「安芸入江保預所円行請文」によって入江保預所の請文を提出していることと併せてみると数ヶ月の間に入江保雑掌と円行預所との係争が起こったといえよう。この入江保雑掌は視点をかえると〈寮雑掌〉と称することができるであろう。

だが、公領（国領）の保ではなく、荘域の保として知行・支配する場合もある。たとえば、応長二（一一三二）年三月 日付の「播磨福井莊東保宿院村地頭代澄心陳状」の「播磨国福井莊東保宿院村地頭代澄心重弁申」「為当保雑掌頼祐、巧新儀今案、立二十六箇条篇目、就訴申」云々という記載<sup>(34)</sup>からも窺える。

このように国家体制が崩壊しながらも体制遺制とでもいえる公領（国領）を支配する国衙・各寮・府が存在し、それぞれの組織体によって雑掌が任命・補任され、年貢所当の徴収をはじめ、年貢・下地などを含んだ所務相論の矢先に立つて職責を果たしていたことが理解できるであろう。

ただ、公領（国領）における雑掌の任命・補任主体——国衙・大宰府・寮（大炊寮・内蔵寮・主殿寮・掃部寮・左馬寮）など——は、ここで垣間見た数例にすぎないであろう。また、公領（国領）での雑掌とその任命・補任主体のすべてにわたって検討する余裕と十分な史料の抽出はできなかった。この課題は別の機会に譲ることにしたい。

では、次に荘園公領下での雑掌——荘園所領での寺院雑掌・神社雑掌・権門雑掌と、公領・国領での国衙雑掌・大宰府雑掌・寮雑掌など——の職責について、あらためて詳しく検討していくことにしよう。

## 註

- (1)(2) 松崎英一「国雑掌の研究」(『九州史学』第三七号・三八号・三九号合併号所収)
- (3) 『鎌倉遺文』第一〇巻、第七三一二号文書(以下同様にて、鎌倉遺文一〇七三一二というように略す)
- (4) 鎌倉遺文六四四一二七
- (5) 鎌倉遺文一〇七〇九三
- (6) 鎌倉遺文一三一九七四五
- (7) 鎌倉遺文二二一六六四七
- (8) 鎌倉遺文二九一二二一〇四
- (9) 鎌倉遺文三二二四九四三
- (10) 鎌倉遺文一四一〇四四三
- (11) 鎌倉遺文一六一二〇三一
- この史料には、「於雑掌者、被改補于從運了」という文言があり、明らかに雑掌は任命・補任主体から任命されるいは補任されていたことを示唆している事例であろう。
- (12) 鎌倉遺文三四一二六五四
- (13) 鎌倉遺文三四一二六六七〇
- (14) 鎌倉遺文一三一九七八六
- (15) 鎌倉遺文一八一三九一一
- (16) 鎌倉遺文鎖三二一二四七〇五
- (17) 鎌倉遺文四一三一二二九
- (18) 鎌倉遺文一一八三九七
- (19) 鎌倉遺文一七一三二二七
- この史料と同様、地頭中沢基員の狼藉・殺人罪を訴える雑掌の申文は本文で掲げたが、永仁元(一一三九三)年十一月 日付の「丹波国宮田莊雑掌円全申状案」の「近衛殿御領丹波国宮田莊雑掌円全謹言上」の「傍莊大山莊地頭中沢三郎左衛門尉基員去建治二季十二月十二日令殺害西善主從間」という文言によつてわかり(鎌倉遺文二四一八四一四)、罪科の裁決がなされていないかったことを示している。
- (20) 鎌倉遺文三二一二四八九六
- (21) 鎌倉遺文三二一二四八九五
- (22) 鎌倉遺文四一三一一八八〇
- この史料を含めて「権門雑掌」は諸史料にみられる。たとえば、「長講領伊予国忽那嶋雑掌道覚」(永仁三(一一



二九五) 年五月二十三日付の「関東下知状」、鎌倉遺文二四一―一八八三五)、「前右衛門督家卿為相 雑掌尚弘与民部卿家卿為世 雑掌僧寛妙相論播磨国細河荘地頭職」(正和二(一三三三) 年七月二十日付の「関東下知状、鎌倉遺文三二―二四九二八)、そして「若狭国名田荘文書事」「右如花山院前中納言家雑掌申状者」という文言(嘉暦二(一三二七) 年と認識されている「賢舜請文案」、鎌倉遺文三八―二九三六) などから「権門雑掌」が存在することを挙げておきたい。

- (23) 雑掌非法の史料を次に三例ほど掲げると、文永十一(一二七四) 年七月 日付の「備後大田荘大田方地頭等陳状」の「就致非法雑掌而支申事」(鎌倉遺文一五一―一七〇〇)、文保二(一二三二八) 年十月十九日付の「丹波大山荘百姓申状案」の「前雑掌慈門寺公文、去年御年貢、悉以乍令収納、不運寺家」(鎌倉遺文三五―二六八一五)、そして元亨四(一二三四) 年九月 日付の「伊予弓削島百姓申状」の「欲当雑掌弁房被致新儀非法間百姓等依難安堵仕、(中略)、自御寺中、被下御憲法雑掌」(鎌倉遺文三七―一八三六) などがあり、各荘園で雑掌の非法がみられる。

- (24) 黒田俊雄「鎌倉時代の荘園の勸農と農民層の構成」(『日本中世封建制論』所収)  
鎌倉遺文三一―二三五九八

(25) この史料にみえる「関雑掌」以外に、次のような雑掌が諸史料にみられる。すなわち、「甌島雑掌」(鎌倉遺文二九―二二三三三)、「三国湊雑掌」(鎌倉遺文三四―二

五八五四)、「名田荘内下村前雑掌」(鎌倉遺文三一―二四〇三八)、そして「福井荘東保」「当保雑掌」(鎌倉遺文三二―二四五五〇) などがある。

- (26) 鎌倉遺文三七―二八八二二  
(27) 鎌倉遺文三七―二八九二〇  
(28) 鎌倉遺文三八―二九五二四  
(29) 鎌倉遺文三八―二九二三一  
(30) 鎌倉遺文一六一―二二二二  
(31) 鎌倉遺文二九―二二四〇五  
(32) 鎌倉遺文三九―三〇五七七  
(33) 鎌倉遺文三九―三〇五七六  
(34) 鎌倉遺文三二―二四五五〇

- (35) この史料と同様に私領としての保がる。その事例を掲げると、嘉暦二(一二二七) 年八月二十五日付の「関東下知状」にみえる「海老名太郎忠国法師法名 与加賀国興・浅野両保雑掌信智等相論下地以下事」「当保者、為忠国重代相伝開発領、下地并公文職名田畠等相違之所」という事態が生じていたが、開発所領の重代相伝の保であることが窺える(鎌倉遺文三八―二九九四〇)。  
本文中で掲げた以外に、「掃部寮領河内国大庭野雑掌」(弘安三(一二八〇) 年正月二十六日付の「六波羅下知状」、鎌倉遺文一八―一三八四五) という文言から掃部寮雑掌が存在していた。



### 第三章 莊園公領での雑掌の職責の諸様相

——正税租税徴収・運上から年貢・所務相論に至る職責の多様化によせて——

古代律令国家以後の雑掌は「国雑掌」という呼称が用いられた。この国雑掌は正税徴収・運上や所済勘文などの職責へと転化してきたことは、すでに承知されているところである。

公地制度が崩壊して莊園の発展によって、莊園と公領（国領）が併存する莊園公領制下の王朝期を経て、鎌倉・室町（幕府）期に至る時期においても雑掌は存在し続けるとともに、すでに「国雑掌」以上に多種多様な存在形態へと展開してきたことは論及してきたとおりである。つまり、「莊・郷雑掌」と理解されてきた雑掌は莊・郷・村・名・御厨・保・湊・島・泊などと称する所領に属する莊官または官人ではなく、むしろ「雑掌」を任命・補任した主体者であると考えている。それゆえ、莊園下では「寺院（寺家）雑掌」・「神社（社家）雑掌」・「権門（勢家）雑掌」であり、それぞれの主体者によって対象地に配属されるのが「雑掌」であるといえる。

これらの雑掌以外に公領（国領）においても、国雑掌とは別に「国衙雑掌」をはじめ、「大宰府雑掌」・「寮雑掌」なども存在していたことを提示してきたが、次に各々の雑掌の職責について、その変移の是非を留意して、諸史料を検討しながら考えていくことにしたい。

まず、王朝期の雑掌の職責は割愛するが、すでに掲げた久遠寿量院寺家雑掌と同院領駿河国宇都谷郷の今宿傀儡と七ヶ条の項目に亘って相論<sup>①</sup>が起きたことをはじめ、地頭あるいは御家人、または他所属雑掌とで境界や年貢以下の所務相論が生じている。すなわち、建長五（一二五三）年二月十一日付の「北条長時書状案」の「尾張国堀尾莊地頭家綱与長岡莊雑掌久資法師・地頭盛氏相論堺事」という文言、文永九（一二七二）年九月二十三日付の「関東下知状」の「陸奥国平泉中尊寺衆徒与中尊・毛越両寺雑掌有相論条々」という文言<sup>②</sup>（免田畠事、別当職事、檢注事<sup>③</sup>）の

を含み十八ヶ条項があり、所務条々といえよう、建治二（一二七六）年六月 日付の「紀伊阿氏莊雜掌從蓮申状案」の「聖護院宮御領近江国檜物莊雜掌与地頭相論事」という文言、弘安十（一二八九）年四月十九日付の「関東下知状」の「最勝光院領備前国長田莊雜掌与当莊賀茂郷内中村新山下賀茂地頭式部孫右衛門頼泰・靄峰河内村地頭式部左衛門二郎光籐・紙工式部六郎光高相論所務条々」<sup>④</sup>、「莊官職公文・案主・惣追捕使・押領使・諸社神主・事」という記載（検断事、狩獵并賀茂郷小河漁事という三ヶ条）、永仁元（一二九三）年九月十二日付の「関東下知状案」の「但馬国氣比水上莊雜掌行如与地頭大田左衛門太郎政頼相論所務条々」という文言（正吉名事、重領名田事、一色畠事を含めて九ヶ条）、そして延慶（一二〇九）年九月十九日付の「鎮西御教書案」の「仁和寺南院領肥前国杵嶋南郷雜掌堯深与当莊一分地頭白石左（備門之）□□次郎通朝法師（法名）相論所務条々事、如雜掌所進弘安十年十月十五日・正応五年閏六月十六日関東御下知状者、依年貢未進、令折中下地之由、所見也」という記載によると、雜掌の職責は領域の境界相論から年貢・田畠下地・検断・検注・所職を含んだ所務相論、そして下地中分を含んだ所務相論へと拡大されてきたことは諸史料によつて理解できる。

とりわけ、下地以下所務相論とともに、年貢を含む所務相論での雜掌の職責は少なくないが、下地以下所務の相論は恐らく地頭（在地領主）の下地進止権の掌握意図と関連する事象と考えている。また、年貢を含む所務については、律令期から王朝期に至る国雜掌の主な職責であつた正税租税運上や正税徴収の系譜をひくものと考えている。その例証としてすでに掲げた弘安十（一二八七）年十月十三日付の「関東下知状案」の「造東大寺周防国雜掌与同国与田保公文朝保法師（法名）覚朝相論所職并年貢事」という文言を挙げることができ、中世において国雜掌と保公文が相論する年貢租税の徴収をおこなう職責が示されているといえよう。

そして、次の諸史料から、この年貢徴収の職責を寺院・神社・権門および公領（国領）の雜掌らも継承していたことがわかる。すなわち、永仁四（一二九六）年九月二十七日付の「関東御教書」の「法金剛院領甲斐国稻積莊、雜

掌申難・済年貢・由事」という文言、乾元二（一三〇三）年三月二十五日付の「六波羅奉行入連署書下案」の「東大寺・雑掌・順慶申美濃国茜部莊年貢事」という文言、文保二（一三一八）年十二月十二日付の「鎮西御教書案」の「筑前国志登社・雑掌・教賢与地頭・託磨太郎入道寂意（今春死去）・代親・清相・論年貢事」という文言、そして正中二（一三二五）年二月日付の「菅三位菅原長宣家・雑掌・宗清・申状」の「菅三位家・雑掌・清謹言上」「欲早被経御・奏聞、被下和与論旨於武家、安楽寺・領薩摩国・分寺下地并年貢事」「当御領者、菅三位家御相承之地、爰御家人国分助次郎友貞・募武威、有限御年貢・公事等抑留之間、先雑掌友任・申成・論旨於武家及鎮西」という記載がそれであり、社寺権門の雑掌は遂行すべき年貢徴収の職責に努めていたことが相論や申上によって窺える。

また、すでに触れた正中二（一三二五）年十月十六日付の「鎮西御教書」の「大宰府・雑掌・申薩摩国阿多郡北方年貢事」という文言で表現されているように、大宰府領公領（国領）の雑掌が年貢所当米徴収に努めていることを示すが、狼藉を申上した安芸国主殿寮領入江保の雑掌が所当米にかかわる非法をおこなっていることは、元徳三（一三三一）年三月十日付の「六波羅御教書」によってわかる。すなわち、「安芸国入江保雑掌行〇押妨新田、抑留所当米〇事」という文言がそれである。

これら以外にも公領（国領）と考えられる安芸国飯室村では地頭による年貢にかかわる非法が、弘安六（一二八三）年の史料と承知されている「安芸飯室村雑掌申状案」にみえる。すなわち、「〇芸国飯室村・雑掌・謹言上」「〇為当村地頭遠藤内（不知実名）張行種・非法、今抑留年・御年貢上者、且停止彼新儀、且任員数、被糺返押領物等子細事」「〇村者、以山野林之所出、備御〇貢之条、先規傍例也、而或令押〇応輸田畠并郡司林之間」という記載から年貢などの押領物を返還させようと申し上げていることがわかる。また、地頭の押領には応輸田畠や郡司（所有）林などを含んでいたことが窺える。

このように年貢にかかわる非法・狼藉に対してそれぞれの所管の雑掌は、所務条々の相論と同様に多くの労力を

費やしてきたといえよう。ただ、雑掌の勤仕の大半が地頭らによる非法・狼藉の係争・相論への対応であったとしても、雑掌にとって年貢や公事をはじめ、法会・諸行事用途の収支を明確にする職責を担っていたことは確かなことであり、次の二史料はそのことを物語ってくれよう。

それらは、文永十（一二七三）年九月二十三日付の「伊予弓削島荘年貢色と物未進注文」<sup>⑬</sup>と、時期がずっと下る嘉元三（一一三五）年十二月二十九日付の「播磨久留美荘年貢米用状」<sup>⑭</sup>である。

弓削島荘の未進注文には、文末に「康経（花押）」という署名・押捺があり、  
注進 御年貢色と未進注文之事

合

（為力）  
卯弘名 麦二斗六升 大俵塩五俵三斗  
籾一枚 引出物塩三俵

助成名 麦一石八斗三升五合 大俵塩九俵二斗  
苧一目 梅干三升 籾一枚 引出物塩三俵

有重名 麦六斗四升 大俵塩十六俵一斗五升  
籾一枚 引出物塩三俵

（中 略）

恒光名 麦二斗一升 大俵一三俵 脇苧一目  
籾一枚 引出物塩三俵

近弘名 麦二斗九升七合 大俵塩十四俵三升  
籾一枚 引出物塩二俵 此季野浜八俵<sup>⑮</sup>

右、注進如件

と記載されている<sup>⑯</sup>。そして、同年月日の「伊予弓削島荘雑掌康経注進状」の末尾にも「雑掌（花押）」と明示されている<sup>⑰</sup>ことから康経が雑掌であることは確かである。次に、久留美荘の算用状をみると、

久留美御荘<sup>嘉元三</sup> 領家御年貢米目録算用事

合

定田七十五町三反十五代

(中 略)

定田五十一丁<sup>(五)</sup>反四十四束五把

損田不作并河成二十丁六反二十代<sup>定田反別二十代  
居合損亡定</sup>

得田三十町九反二十四束五把

(中 略)

都合九十三石六斗六勺<sup>(一升脱カ)</sup>

御莊下用分

六石六斗六升六勺 村々井料先例<sup>加新井  
料米定</sup>

(中 略)

右、皆進上算用如件、

という記載<sup>(20)</sup>があり、文末には公文や所務代官とともに「雑掌僧覚知」の署名がある。

このように荘園の年貢米の収支報告である算用状から雑掌の関与がわかる。ただ、直接雑掌が事務処理の職責を担っていたものかは、この史料からは判断しがたいが、律令期の雑掌に比べて鎌倉・室町期の雑掌の職責は年貢徴収・運上や所務条々に大きく関与し、荘園公領制の社会・経済機構を支える中枢に位置していた存在であると理解しても大過ないであろう。

註

(1) 『鎌倉遺文』第一〇巻、第七〇九三号文書（以下同様）にて、鎌倉遺文一〇一七〇九三というように略す

- (2) 鎌倉遺文一〇—七五二一  
 (3) 鎌倉遺文一四—一一五二  
 (4) 鎌倉遺文一六—一二三七〇  
 (5) 鎌倉遺文二一—一六二四一  
 (6) 鎌倉遺文二四—一八三六三  
 (7) 鎌倉遺文三一—二三七六六  
 この史料と同様、ここで下地中分の史料として応長元  
 (一三一)年八月十二日付の「六波羅下知状案」に  
 「以和与儀、於向後者、可令中分一荘下地之由」とある  
 和泉国大島莊雜掌と地頭との和与下知の案文を掲げてお  
 きたい(鎌倉遺文三二—二四三九五)。  
 (8) 鎌倉遺文二一—一六三六六  
 (9) 鎌倉遺文二五—一九一五二  
 (10) 鎌倉遺文二八—二一四〇五  
 (11) 鎌倉遺文三五—二六八八九  
 (12) 鎌倉遺文三七—二九〇一六  
 (13) 鎌倉遺文三八—二九二三一  
 (14) 鎌倉遺文四〇—三一三九〇  
 (15) 鎌倉遺文二〇—一四九六二  
 (16) 鎌倉遺文一五—一四一九  
 (17) 鎌倉遺文二九—二四二六  
 (18) 鎌倉遺文一五—一四一九  
 (19) 鎌倉遺文一五—一四一八  
 (20) 鎌倉遺文二九—二四二六

結びにかえて——検討すべきいくつかの課題から——

雜掌に関する諸先学の論稿で先駆的な原田重、松崎英一両氏の論及は、雜掌の存在に大きな光を当ててきたといえる。すでに述べたが、両氏の雜掌究明の前提には、坂本太郎氏の四度使雜掌の指摘があつたことは確かであろう。ただ、原田・松崎両氏が提示した雜掌に対する言及には、いくつかの検討課題が赤松俊秀氏や吉村茂樹氏らによつて指摘されている。とくに、赤松氏が指摘した所務雜掌と沙汰雜掌の存否の課題は、ここでは検討できなかった。ただ、雜掌関係の諸史料を繙くかぎり、赤松氏が懷疑的な所務と沙汰の両雜掌は存在しなかつたと想定しているが、詳しく史料を検討した訳でないので断定し得る根拠はない。この点は今後の検討課題としたい。

また、雜掌の居住が在京か、在地かについても課題としてあるが、ここでは考えることができなかった。ただ、いくつかの史料から「在京」云々の文言や記載が抽出し得るが、へ在京する雜掌」と解釈するまでの究明にいたつ

ていない。〈在地の雑掌〉と〈在京の雑掌〉の実態の存否から論究すべきであろう。この課題の解決に繋がらないが、抽出した〈在京の雑掌〉の史料の内、次に三例ほど掲げておくことにしたい。

それらは、「為京都雑掌之間、雖不及沙汰」という文言（建長六（一二五四）年十月三十日付の「関東御教書」<sup>(4)</sup>）、「為在京之身」という文言（建治元（一二七五）年十一月十日付の「紀伊阿氏河莊雑掌從蓮重申状案」<sup>(5)</sup>）、「而又為光清地頭御方沙汰雑掌、及在京多年候」という記載（永仁三（一二九五）年「カ」四月十七日付の「光清請文」<sup>(6)</sup>）などであり、いずれも〈在京雑掌〉の事象しか明示されていない。

このように〈雑掌〉は、神社・寺院・権門と大宰府・国衙・寮（大飯寮・内蔵寮・主殿寮・掃部寮・左馬寮）などの任命・補任主体に所属する存在であることを示した以外に、〈国雑掌〉と封戸物徴税との関係や最も基本的な〈国雑掌〉姓名の統一的〈名〉の意図とは何かなどを含めて、まだ検討すべき課題は少なくないことを提起して結びとしたい。

## 註

- (1) 原田重「国雑掌について」（『九州史学』第七号所収）  
松崎英一「国雑掌の研究」（『九州史学』第三七・三八・三九合併号所収）
- (2) 坂本太郎「朝集使考」（『史学雑誌』第四十二卷、第五号所収）
- (3) 赤松秀俊「雑掌について」（『古代中世社会経済史研究』所収）
- (4) 吉村茂樹「国掌について」（『国司制度の崩壊に関する研究』所収）
- (5) 『鎌倉遺文』第一一卷、第七八一六号文書（以下同様にて、鎌倉遺文二一七八一六というように略す）
- (6) 『鎌倉遺文』一六一・一二一二・鎌倉遺文二四一・一八八〇八